

令和元年6月4日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07083

研究課題名(和文)社会的脆弱性の継続調査：宮城県牡鹿半島と熊本県阿蘇地域を事例に

研究課題名(英文)Continued research on social vulnerability: Cases from Oshika peninsula (Miyagi Prefecture) and Aso (Kumamoto Prefecture)

研究代表者

ヴィルヘルム ヨハネス (Wilhelm, Johannes)

慶應義塾大学・総合政策学部(藤沢)・講師

研究者番号：00805004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：2つの調査地(A阿蘇、B牡鹿半島)において社会的脆弱性に関する継続調査を行った。Aではウィーン大学と共に予定通りに半世紀後の集落調査を行えた。そのデータは現在整理され、今後分析される。また、研究界においても知られていなかった牧野関係資料を数多く入手でき、今後活用していきたい。Bの領域は二年度目に研究の重点を置いた。その中で、恐らく国内においても稀なホヤ産業を取り巻く現状に関する詳細な論文の執筆をしたが、残念なことに報告期間での出版は間に合わなかった。日本へ移り住み始めた二年間を通して、以前からの研究をスムーズに行えた大きな要因が本科研費のスタート支援であったため、大変ありがたく思っています。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的脆弱性のコンセプトは未だあまり知られていないが、社会が置かれている脆弱性に関する研究の意義は今後は徐々に知られていくと思われる。二年を通して、社会的脆弱性の初歩的なパターンの分類を作成することも出来た。今後は、この分類をより概念化し、他の研究対象地域において立証できるかが重要である。また、事業期間中に本来の研究内容を超える資料も数多くアウトスピンとして収集でき、これらは今後の個人的な研究だけではなく、該当する市域の住民と共有しつつ、共に研究を深めたい。

研究成果の概要(英文)：Research on Social Vulnerability was conducted in Aso (A) and Oshika peninsula (B). In A, a survey of a settlement was conducted 50 years after an initial survey in 1968/69. Also, some very precious historical sources could be found and archived. These had not been on the researcher's radar in the initial phase and will be a good resource for future projects. On the other hand, more weight was planned for B in the project's second year, and a paper on the troublesome situation surrounding the sea squirt industry of southern Sanriku could be written. However, as traditional forms of publication takes much time, I'm still waiting for the final publication by the editors in charge. Nevertheless, this will be the first detailed account on the sea squirt industry of southern Sanriku after the 311 events, and it is actually uncovering unknown aspects in which the producers are currently in, such as the role of subsidies by TEPCO.

研究分野：日本学・民俗学

キーワード：社会的脆弱性 コモンズ 東日本大震災 入会権 日本研究史

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

近年、特に災害の研究において、脆弱性（Vulnerability）やレジリエンスといったキーワードを中心に、それらの出来事と社会の関係や展開に注目がなされてきた。しかし、社会的脆弱性と言う、簡単に言い換えれば、社会に要因する脆弱性に関するものは殆どなされてきておらず、数少ない研究においても、その定義や理論化が現在行われつつ有る。そういった背景のもと、この研究は、社会的脆弱性に関わる諸問題を、以前から調査してきた二つのフィールドを用いてより理論化を進めるために始めた。同時にまた、研究者本人の外国からの移動に伴う本国における研究活動の継続を可能にするものであった。

### 2. 研究の目的

本調査は、社会的脆弱性をフレームワークとしている。脆弱性は、システムにストレスが要因となって起こりうる被害の程度を指すもので、社会的脆弱性は社会構造や社会プロセスといった条件が、例えば地震の様なストレスによって起こす被害を指す。即ち、物質的な被害ではなく、社会的な被害である。また、レジリエンスは、危機的状況乗り越える能力であり、近年の研究では脆弱性とレジリエンスは個々に存在するものではなく、常に社会プロセスや社会が共有する現実の解釈によって構築され、それらが権力や個人やグループによる資源へのアクセスの格差の結果であるとみなされている。脆弱性とレジリエンスという用語のペアは元々ヒューマン・エコロジーの分野で発案され、後に、環境的・経済的・社会的・制度的な脅威とそれらの相互作用を分析するために様々な社会科学の分野でも用いられる様になった。それぞれの学科の手法や研究者の視点によって若干の差は見られるものの、一般的に、脆弱性は常にダイナミックに変動しているものであるため、調査する社会の基礎的条件やその中で生じている複雑なプロセス、枠組み(例えば、構造的な差異やアクセス可能な社会文化的資源や物質的な資源など)によって形成されている。逆に、レジリエンスは被害の軽減や失われた機能の復旧、又は、新たに生じた条件に対応する個人や集団が持っている能力である。そのため、本継続調査は具体的に、災害や社会経済的な要因によって危機的状況に置かれた集落の住民がどの様に危機的な状況乗り越えていくかを対象としている。

### 3. 研究の方法

本調査の方法は、両方の対象地におけるフィールド調査であり、行政、組合や住民などを相手にしたインタビューと現場の観察や野焼き等の参加型の観察を含む。また、新たな史料の記録方法としてカメラと三脚を用いた。

### 4. 研究成果

二年間に渡り、以前の勤務先であったウィーン大学での研究を継続し、同時に、日本においても発展させることが出来た。具体的には、フィールドに近づいた分だけ、訪問が可能になり、人間関係も収集資料もより深いものを得ることができ、また、当初の社会的脆弱性のコンセプトに関するより詳細な側面を発見できた。

最も大きな成果として阿蘇と三陸の両フィールドに置いて、それぞれ2つだけあげると、それは阿蘇の場合、ウィーン大学と共に2018年の夏季に、1968年の世帯調査に沿ったサーヴェイが行えたこと、また、阿蘇神社内に保管されている阿蘇地域で明治初期の原野入会の官有化に伴う払い下げの行政議事録を発見し、記録できたことである。その払い下げの史料は、当初、本研究課題を開始した際には全く知られておらず、保存状態が好ましくないため、まずは、デジタル写真で記録し、今後の研究材料として活用したい。つまり、日本各地で起きている少子高齢化という社会的な変動が今後も行政的な対応を必要としており、明治維新以降の大きな制度変化で起きた具体的な地域における共有資源のあり方を如何に継続していくかの記録として比較対象資料としての価値がある。一方で、ウィーン大学との共同調査においては阿蘇市内のN集落における半世紀に渡る社会の変貌過程、宗教観、農具の保有状態、共同作業に関わる意識などと合わせて、幸福度の調査を盛り込んでみた。これらの分析は助成期間内には終了できなかったものの、今後の研究に大変役立つものになるであろう。また、N集落の住民も継続調査に積極的に取り組んでいただいたため、サーヴェイの7割以上という回収率を達成できた。これは、慌てず慎重に構築した信頼関係の成果と言えるものであり、時間的にゆとりのある研

究調査においてのみ得られる成果でもある。また、三陸地方では事業の期間中に国勢調査の最新データが公開され、以前から注目していた三陸沿岸の浦々における人口変動が正確に把握でき、社会的脆弱性の評価に役立てることが出来た。しかし、特に二年目になり、地元で盛んなホヤの養殖業における状況にスポットをあてた際に、社会的脆弱性の今後の理論化に欠かせない様々、かつ、零細な諸情勢（地域経済、東京電力による風評被害に伴う賠償、韓国との外交関係悪化など）も重要な理論の基盤となることが見えてきた。残念ながら、その成果の出版は報告期間内に間に合わなかったが、今後の研究展開では、この例で得られた知識を阿蘇を始めとする他の地域でも検証できないか探りたい。

また、スタートアップ支援としてありがたく頂いていました助成金は、具体的に阿蘇の草原利用と社会変動（主にライフスタイルの変化に伴う社会の変化を社会資本と呼ばれる人のつながりを図る試み）の関係性に関わる次の研究事業に繋がっており、個人的にはその成果が一番喜ばしい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- (1) Johannes Wilhelm (2019): Sea pineapples in troubled waters: on the local-global interdependencies of the sea squirt (Hoya) industry in the aftermath of the 3.11. disaster. In: Wolfram Manzenreiter, Ralph Lützel and Sebastian Polak-Rottmann: *Japan's New Ruralities. Coping with decline in the peripheries*. (In print) (査読有り)
- (2) Wilhelm, Johannes (2018): Seven Years after Disaster. Fisheries Communities in Coastal Pacific Tōhoku. In: Giovanni Bulian and Yasushi Nakano (eds.): *Small-scale Fisheries in Japan. Environmental and Socio-cultural Perspectives (= Ca' Foscari Japanese Studies, 8)*. Venice: Ca' Foscari University Press. pp. 129-152. (査読有り)
- (3) Wilhelm, Johannes (2018): Disaster Resilience in Coastal Pacific Tōhoku: Restoring Livelihood after the 2011 Tōhoku Earthquake and Tsunami. In: *Beiträge zur Japanologie*, 46. pp. 131-150. (査読有り)
- (4) ヴィルヘルム・ヨハネス (2018): 「集落の崩壊と地域活性化に見られる住民の葛藤: 秋田県上北秋田郡小阿仁村八木沢を事例に」 『総合人間学』, 12: 81-98. (査読有り)
- (5) Wilhelm, Johannes (2018): Aspects of social vulnerability as seen in three hamlets of northern Tōhoku and central Kyūshū. In: Committee of International Affairs, Association of Rural Planning, Japan (ed.): *Resilience and Sustainability of Rural Areas. (= Proceedings of 2017 Japan- Korea Rural Planning Seminar)*. Tokyo: Association of Rural Planning, Japan. pp. 21- 22. . (査読なし)

〔学会発表〕（計 2 件）

- (1) ヴィルヘルム・ヨハネス (2018/11/17) 阿蘇の社会と草原 — 社会資本とコモングの諸相. 熊本学園大学、阿蘇学会
- (2) Wilhelm, Johannes (2017/12/9) Aspects of social vulnerability as seen in three hamlets of northern Tōhoku and central Kyūshū. 2017 Japan- Korea Rural Planning Seminar, Kumamoto, Japan, 農村計画学会、日韓交流シンポジウム 2017

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。